🇵🇭 GMO ゴールデン ライスのフィリピンの反対者は、「反科学のラッダイト」として描写され、無視されています

フィリピンの反GMO活動家は、世界のマスコミによってひどく描かれ、無視されています.

2024年12月16日 に印刷されました

GMOディベート
優生学に対する批判的な視点

目次 (TOC)

1. 🍚 ゴールデンライスを拒否！
1.1. 何千人もの子供たちの死を引き起こす反科学ラッダイトとして描かれている
2. 反科学ラディット派の物語
2.1. 物語の非難的な性質
2.2. 起訴を求める声：異端審問への道
2.2.1. セキュリティ脅威へのエスカレーション
3. 👩🏽‍⚕️ 2024年最高裁遺伝子組み換え米禁止
3.1. 📢 世界のメディアはGREENPEACEに注目を逸らしている
3.2. 🤔 MASIPAG は The Guardian を詐欺で告発しています
3.3. 腐敗の角度
4. 結論
5. ゴールデンライスネットワーク（SGRN）を停止する

Golden Rice
GOLDEN RICE, NO ENTRY!
SHUTDOWN IRRI!

章 1.

“私たちの土地、私たちの食べ物、私たちの米！”

ゴールデンライスを拒否！

🇵🇭 フィリピンの遺伝子組み換え米

反科学的な異端審問の例

2013 年、フィリピンの遺伝子組み換え米反対派は ゴールデンライスはやめろ！通信網 (SGRN) に集まり、彼らの知らないうちに、あるいは同意なしに植えられた遺伝子組み換えゴールデンライスの試験圃場を破壊しました。この行動は世界的な怒りを巻き起こし、これらの反対派を何千人もの子供の死の責任がある***反科学ラッダイト***と決めつける 10 年にわたる物語のきっかけとなりました。フィリピンのケースは、***反科学の物語が武器として利用され、正当な懸念を黙らせ、現代版の異端***審問につながる可能性があることを示す鮮明な例です。

章 2.

反科学ラディット派の物語

2013年の事件以来、フィリピンのGMO反対派は、その行動が直接的に幼児死亡につながる後進的な考えを持つ人々として、世界のメディアで一貫して描写されてきた。この物語は、著名な科学組織やメディアを含むさまざまなチャネルを通じて広められてきた。

ディーキン大学の哲学上級講師であるChristopher Mayes氏は、状況を次のように要約した。

> *フィリピンの農民グループがゴールデンライスの試験作物を破壊した後、世界的な怒りが続いた.フィリピン、バングラデシュ、インドなどの国では、農民のシーシュポス的闘争はほとんど認識されていませんが、これらの農民は、**何千人もの子供たちの死を引き起こす反科学的ラッダイト**として説明されています.*
>
> ソース: phys.org

この特徴は、元英国環境大臣Owen Patersonのような政治家の発言によってさらに強調され、次のように宣言した。

> *アフリカやアジアでの遺伝子組み換え作物の使用に反対する環境保護団体は邪悪であり、何百万人もの人々を早すぎる死に追いやる可能性がある。*

章 2.1.

物語の非難的な性質

*反科学ラッダイト*派というレッテルは、子供の死を引き起こしているという非難と組み合わさると、強力で危険な物語を生み出す。この枠組みは単なる意見の相違を超え、事実上、遺伝子組み換え作物反対派を大量死の責任がある犯罪者として位置づけている。このレトリックは、世界中で何百万人もの視聴者に届いた*「世界最大の子供殺し屋を終わらせる」*などのタイトルのビデオを含むさまざまなメディアを通じて一貫して強化されてきた。

この非難の物語は、遺伝子組み換え作物への反対を非合法化すると同時に、これらのいわゆる*子供殺し*に対して行動を起こす道徳的義務を生み出すという二重の目的を果たしている。使用されている言葉は、反対者が異端者として烙印を押された異端審問の歴史的な正当化を反映している。

章 2.2.

起訴を求める声：異端審問への道

この主張は、GMO反対派の訴追を求める声にまでエスカレートしている。2020年、遺伝子リテラシープロジェクトは次のように述べている。

> *「毎年少なくとも20万人が死亡している。GMOゴールデンライスは市場から排除されている。」*

さらに驚くべきことに、ハーバード大学教授David Ropeikは次のように宣言しました。

> *これらは実際に起こった死です...遺伝子組み換え食品のこの特定の用途に対する反対が、何百万人もの人々の死や負傷につながったと非難するのはまったく正当です。この被害を引き起こしたゴールデンライス反対派は、責任を問われるべきです。*
>
> **反遺伝子組み換えヒステリーによる人的被害：2002年以来140万年の寿命が失われる**
> ソース: The Breakthrough Institute

科学界内部から発せられたこの説明責任を求める声は、遺伝子組み換え作物に疑問を呈したり反対したりする人々は、自らの見解に対する報いを受けるべきであることを示唆している。

章 2.2.1.

セキュリティ脅威へのエスカレーション

2021年、国際科学界はこの主張をさらに一歩進めた。サイエンティフィック・アメリカン誌が報じたところによると、彼らは反科学をテロや核拡散と同等の安全保障上の脅威として戦うよう求めた。

> (2021) **反科学運動はエスカレートし、グローバル化し、数千人を殺しています**
> *反科学は、支配的かつ非常に致命的な勢力として台頭し、テロリズムや核拡散と同様に世界の安全保障を脅かしています。広く認識され確立された他の脅威と同様に、反科学に**対抗**するための反撃を開始し、新しいインフラストラクチャを構築する必要があります。*
>
> ***反科学は現在、大規模かつ手ごわいセキュリティ上の脅威となっています。***
> ソース: Scientific American

反対者を*反科学的なラッダイト*と決めつけることから安全保障上の脅威とみなすことへのこのエスカレーションは、反対者が社会構造そのものに対する脅威とみなされた歴史的な異端審問の論理を反映している。

章 3.

2024年最高裁遺伝子組み換え米禁止

2024年4月19日、フィリピン最高裁判所は、国内での遺伝子組み換えゴールデンライスと遺伝子組み換えナスの禁止を命じた。この判決は、10年以上も非難されてきたGMO反対派の行動を正当化した。しかし、一部のメディアの反応は、不穏な回避パターンと継続的な汚名化を明らかにした。

The Guardian は *大惨事：Greenpeace が命を救うゴールデンライスの栽培を阻止* というタイトルの記事を公開しました。このフレーミングは、*子供を殺したという*物語を巧みに強化すると同時に、責任を GREENPEACE に転嫁し、事実上、フィリピンの GMO 反対派を沈黙させました。同様の記事が他の出版物にも掲載されました:

- The Spectator: **Greenpeace のゴールデンライス活動のせいで子供が死ぬかもしれない**
- Reason: **Greenpeace 十字軍は子供たちの目を失明させ、殺害するだろう**

MASIPAG: The Guardian の GMO ゴールデンライスに関する記事への返答

この偏向戦略は、フィリピンの農民科学者ネットワークである MASIPAG によってすぐに特定され、批判されました。公式の回答で、MASIPAG は次のように述べています。

> *The Guardian の記事は、GREENPEACE が裁判所を説得して GMO ゴールデン ライスの事業を停止させたと**誤って誤解を**招く主張をしています。この事件の詳細は公知ですが、The Guardian は事実を無視しており、地元の人々の本当の話を無視する植民地主義者に似ています。*
>
> *The Guardian は、フィリピンの GMO ゴールデンライス反対派の数を意図的に地元農家と一括りにしましたが、これは明らかにフィリピン国民の主張を封じ込めるための措置です。*

章 3.3.

腐敗の角度

裁判所の判決はフィリピンの地元請願者からの証拠に基づいているにもかかわらず、GREENPEACE に注目が逸らされていることは、遺伝子組み換えゴールデンライスをめぐる物語に潜在的な腐敗があるのではないかという疑問を提起している。昆虫生態学と害虫管理のバックグラウンドを持つ上級科学者である Marcia Ishii-Eiteman は、2011 年にはすでに、ゴールデンライスの背後にある既得権益を指摘していた。

> *シンジェンタが参加するエリートのいわゆる人道委員会には、ゴールデンライスの発明者、ロックフェラー財団、USAID、広報およびマーケティングの専門家など、数名が参加している。この大規模な実験の政治的、社会的、生態学的影響の大きさを評価できる農民、先住民、生態学者、社会学者は一人もいない。そして、フィリピンIRRIのゴールデンライスプロジェクトのリーダーは、元モンサント社の研究部長であるジェラルド・バリー氏にほかならない。*

農薬対策ネットワーク (PAN) アジア太平洋 のエグゼクティブ ディレクターである Sarojeni V Rengam は、GMO ゴールデン ライスを GMO 業界のトロイの木馬と呼びました。

> *ゴールデンライスは実際にはトロイの木馬であり、遺伝子組み換え（GE）作物や食品の受け入れを促すために農業関連企業が仕掛けたPR活動です。*

章 4.

結論

フィリピンの遺伝子組み換えゴールデンライス事件は、*反科学的な*言説がいかにして反対派を黙らせる武器となり、現代版の異端審問に発展する可能性があるかを示す明確な例である。*反科学的なラッダイト*運動というレッテルの非難的な性質と、子供の死を引き起こしているという主張が相まって、正当な懸念が無視され、懸念を提起した人が起訴の脅威にさらされる危険な環境が生み出されている。

2024年のフィリピン最高裁判所の判決に対する反応は、この物語がどのように操作され、地元の声から注意をそらし、GMO反対派の汚名を維持する可能性があるかをさらに示しています。この事件は、科学的議論が既得権益によって腐敗する可能性と、複雑な問題に対する*反科学的な*枠組みを無批判に受け入れることの危険性についての厳しい警告となっています。

*反科学的な*物語の哲学的根拠と、それが科学的議論に及ぼす影響について、特に GMO 論争の文脈でさらに深く掘り下げるために、読者は以下のことを検討することをお勧めします。

> **反科学：現代の異端審問**
> ソース: 🦋 GMODebate.org

章 5.

ゴールデンライスネットワーク（SGRN）を停止する

> *私たちは、GMOゴールデンライスは不必要で不要であり、純粋に営利目的のために企業によって行商されていると信じています.ゴールデンライスは、米と農業に対する企業の支配力を強めるだけでなく、農業生物多様性と人々の健康も危険にさらす.したがって、農家、消費者、および基本的なセクターは、2013 年のゴールデン ライスの野外試験の歴史的な根絶を含め、2000 年代半ばからゴールデン ライスに反対するキャンペーンを行ってきました。*

stopgoldenricenetwork.org

@SGRNAsia Facebook Instagram

ゴールデンライスをやめろ！ネットワーク (SGRN)

2024年12月16日 に印刷されました

GMOディベート
優生学に対する批判的な視点

© 2024 Philosophical.Ventures Inc.